

情報教育

と

ワークショップ

Enjoy!



編集にあたって

久野 靖（電気通信大学）

近年、本会会誌編集委員会が全国大会やFITにおいて「公開編集委員会」というイベントを行っていることをご存知だろうか？これは、普段は会誌という紙媒体を経由してしか会員の皆様とやりとりできない会誌編集委員会が、皆様と交流を持つための場として設定されている。

そこにはいろいろな内容が含まれているが、その1つに「会誌でどのような特集をやるのがいいかお尋ねする」というのがある。会場から直接提案をいただいてもいいが、なかなかそこまで積極的に案をいただけないので、壇上に並んだ編集委員が紙に自分の提案を書いて頭上に掲げ、参加者が挙手で投票して上位のものは後日（通常の編集委員会で）実際に特集企画にすることを検討する、という仕組みである。

今回の特集も、2017年3月の全国大会において投票で上位（同率3位、ただし票数でいうと7票）だった「子どものためのワークショップ」という案（五十嵐委員提案）が土台となっている。内容的に教育関係だろうということでEWG（教育WG）の

メンバである久野・伊藤・稲葉が担当として引き継ぎ企画を行い、また大学の事例まで含まれるので「子どものための」は「情報教育と」にさせていただいた。

由来が長くなっただが、今日の教育現場では「アクティブ・ラーニング」「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとなっており、これまでのような知識伝達型の教育から転換しようという機運が高まっている。そこでワークショップにも関心が高まっているのだが、そもそもワークショップとは何かと問われるとたいていの人は即答できないし、人によって定義がばらばらだったりもする。

しかし知識伝達型とは対極にあるワークショップについて知っておくことは、多少とも教育に関心がある人であれば、今日ぜひとも必要だと思われる……ということで、9件の解説で歴史から具体的事例までを含むかなり網羅的な特集をお届けできることとなった。

「1. ワークショップの成り立ちとワークショップの学び」では、ワークショップの実践者・研究

1. ワークショップの成り立ちとワークショップの学び
2. ワークショップ普及に向けた CANVAS の実践
3. ビスケットプログラミングワークショップ—なぜワークショップなのか—
4. 参加者の主体性に基づく、変化を前提とした Scratch ワークショップの実践
5. ワークショップギャザリング—社会・自然環境に開いていく学び—
6. 仮想空間でのプログラミング学習ワークショップ
7. Ruby プログラミング少年団の活動紹介 地方都市でのプログラミング教育の普及に向けて
8. 「自律」と「協調」で広がるオープンなプログラミングワークショップ CoderDojo
9. 文理融合系学部の情報系科目におけるワークショップ的観点の導入



者である著者が、ワークショップとは何か、どのようにして日本に入ってきたのか、何がその本質であるかということについて、平易に解説している。

「2. ワークショップ普及に向けた CANVAS の実践」では、デジタル機器を用いたワークショップに広く取り組み、ワークショップコレクションなどを通じて普及にも貢献してきた著者が、これらの取り組みに至った背景や、どのようなワークショップを開発してきたかを、丁寧に示している。

「3. ビスケットプログラミングワークショップ—なぜワークショップなのか—」「4. 参加者の主体性に基づく、変化を前提とした Scratch ワークショップの実践」は、いずれも小学校低学年からのプログラミング学習に積極的に取り組んできた著者がそれぞれ、自らの活動とワークショップの関係について思うことを記している。小学校からのプログラミング学習はこれからはばらくの間、情報教育における重要なテーマであり、その観点からも大変参考になる解説である。

「5. ワークショップギャザリング—社会・自然環境に開いていく学び—」「6. 仮想空間でのプログラミング学習ワークショップ」「7. Ruby プログラミング少年団の活動紹介 地方都市でのプログラミング教育の普及に向けて」「8. 「自律」と「協調」で広がるオープンなプログラミングワークショップ CoderDojo」では、著者らが自分の運営しているワークショップ的活動の特色や進め方、運営について具体的事例を示している。

最後の「9. 文理融合系学部の情報系科目におけるワークショップ的観点の導入」は大学の授業における事例の紹介であり、授業というワークショップからは遠いと思われる場面でもどのようにワークショップの考えを導入するかの示唆を与えている。

いずれの解説も、それぞれ特色のある（その著者にしか書けない）内容であり、興味深いものとなっている。本特集が読者の今後のさまざまな活動にあたってヒントとなれば幸いである。

(2017年7月12日)